

日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝説教

2004年12月08日

『神に目を注ぐ』

聖書 マタイによる福音書 23 章 16～22 節 賛美歌 155 518

説教 森田幸男牧師

今日の箇所は律法学者やパリサイ派の人々に対する非難の言葉が語られている 23 章の一部を読むこととなります。

今日の箇所は「誓い」ということに関するイエス様の言葉であります。「誓い」というのは固い約束、神仏にかけて固く誓うことです。時には、自分の命をかけて、ということでもあります。それはそこでの約束事の確かさを保証するために、神の名を出し、また自分の命をかけ、そしてもし破ったらどんな仕打ちを受けてもいいと、そういうふうに使われる言葉、約束、これが「誓い」であります。

それはいつの時代でもあることではありますが、ここでは、「誓いでも神殿にかけて誓えば、その誓いは無効だ。」それは守らなくてもよい、ということです。しかし、「神殿の黄金にかけて誓えば、それは果たさねばならない」とあります。「神殿の黄金」というのは、後に「供え物」とありますから、これは神様に捧げられた献金と言ったらいいでしょうか。それにかけて誓えば、果たさねばならないと。つまり、その黄金、供え物は神様に捧げられた物だから、それにかけて誓うことは神様の名にかけて誓うことと同じだから、それは守り、果たさなければなりません。このように当時の律法学者たちは「誓い」でも、果たすべきことと、果たさなくてもいいものと区別をしていたわけです。

17 節、「愚かで、ものが見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。」黄金は神殿に捧げられてこそ、それは神様のものになるのだから、その黄金は勿論尊いけれども、それは神殿に捧げられるから尊いのではないかと、こういうことあります。

18 節を見ると、「『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その上の供え物にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。ものが見えない者たち、供え物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。」これも黄金について言われたことと同趣旨のことです。「祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上のすべてのものにかけて誓うのだ。神殿にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ。天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ」と。

このようにイエス様はおっしゃって、神殿とか祭壇にかけて誓う誓いは無効だけれども、その誓いをいろいろ区分けをして、結局その誓いを空しいものにしてしまっている。そういう状況が当時見られたのであります。そういういろんな言い逃れを、事もあろうに神の教えを人々に説く律法学者がしていると、このようにイエス様は指摘されて、神殿にかけてであろうが、その黄金にかけてであろうが、祭壇にかけてであろうが、その供え物にかけてであろうが、それは等しく神の名にかけて誓うのだから、その誓いに優劣の区別はな

いということをおっしゃられるのであります。

これは当時そういうことが一般にあったのでありましょう。結局このようにしてどういふことになっていたかということ、「誓い」は固い約束の言葉でありますけれども、その誓いでさえこうであるならば、言葉そのものが信用に値しないものになっていった。言うならば、言葉のインフレが起こっていたということではないでしょうか。「インフレ」というのは物価が上がリ、貨幣値打ちが落ちることですね。言葉はあるけれども、その言葉が内実のないむなしなものになっていった。そういうことが当時一般化していた。それは更に言うならば、「信仰」と言おうが、或いはまた「神」と言おうが、「愛」と言おうが、何と言おうが、その実体が失われていた。そういう状態になっていたそのことをイエス様は問題にされたのであります。

この「誓い」の問題についてはここが初めてではなくて、「山上の説教」のマタイによる福音書5章33節以下に、「誓いそのものをしてはならない」というイエス様のお言葉がありました。5章33節、「また、あなたがたも聞いている通り、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」このようにありまして、「わたしは言っておく。何にかけても、一切誓いを立ててはならない」というふうにおっしゃっているわけでありませう。

けれども私たちの実際生活では、約束とか誓いとか誓約とかは、無しには済まされないものであります。そうであれば、イエス様の「一切誓いを立ててはならない」というこの言葉を、もし私たちが律法的に、表面的にとるならば、私たちはイエス様のおっしゃっていることを毎日のように破ってしまうことになります。イエス様がここで積極的に言われていることは何かと言えば、「あなたがたは『然り、然り』『否、否』と言いなさい」と、こうおっしゃっているわけですね。何か語られたら、「はい、そうです。」「いいえ、違います。」それだけにしなさいと言っておられるのです。けれども、これは単純な「Yes」「No」ですけれども、これも「誓い」ではないでしょうか。「これをしてくれますか。」「はい。」答えは「はい」ですね。これは誓ったことにはならないでしょうか。実際は、「やります」と誓っているわけです。「これをお願いできますか。」「いいえ、いろんな用事が重なっていて出来ません」と言えば拒否しているということになるわけです。そういうことですから、「一切誓ってはならない」と言われるのを言葉通りにとれば、黙っているしかないですね。イエス様が、「『然り、然り』『否、否』と言いなさい、それ以上のことはよろしくない」とこういっておられるわけですから。

イエス様がここで、「一切の誓いをたててはならない」と言われるその真意は何かということをお私達は聞かないと、イエス様がおっしゃることを聞いたことにはならないと思う

のです。イエス様のお言葉も約束に満ちているのではないのでしょうか。人には、「誓ってはならない」と言っておられながら、イエス様は確約的な言葉に満ちていると思うのです。例えばこのマタイによる福音書 24 章 35 節にはこういう言葉があります。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」このようにイエス様はおっしゃっています。御自分の言葉にご自分で太鼓判を押しておられます。それでいて一般の我々に、「一切誓ってはならない」と言われるのなら、それは自己矛盾になりますね。それならば、イエス様がおっしゃっておられる真意はどこにあるのでしょうか。

さきほど申しましたように、言葉のインフレ、信仰のインフレ、或いは、愛のインフレ、そういうことが当ても起こっていたし、今もあるし、そうして私たち自身も言葉のインフレを起こしているのではないのでしょうか。

私は原稿を書きながら、言葉の意味を確かめたい時インターネットで辞典を引くのですが、「献身」というのはどうなっているかと引いてみました。これは三省堂の大辞林第二版が出典なのですが、「自分の身を捧げて尽くすこと」「ある物事や人のために、自分を犠牲にして力を尽くすこと」となっていました。そしてその一例として、「独立運動に献身する」というふうな使い方がなされるとなっているのです。それと「献身」は身を捧げるのですから、本当に自分を犠牲にして力を尽くすことだとなつています。ところが私たちはこの「献身」という言葉を献金の時使います。「献身のしるしとして献金をいたします」と言うのですが、その献金は献身という言葉が持つ実体を持っているのでしょうか。「献身」の第二の意味が書かれてありました。「キリスト教で聖職者となることを献身と言う」と出ていて、「献身」という言葉が普通の使い方と、キリスト教では一般の人が牧師とか、聖職者になることを「献身」と言うのだとありました。ですから「献身」の中身は、「自分を犠牲にして自分に与えられた務めに力を尽くすことがキリスト教の聖職者なのだ」と、こういう意味になるわけです。これを見て、自らを省みることを迫られたわけですが。イエス様の当てもそうですし、現在も言葉のインフレというか、最近いらだたく、腹立たしいのは、あの「おれおれ詐欺」の手口です。そういう事実は無いのに、あったようにして、なんだかんだと言って、この番号にお金を振り込んでくださいと言って何十万、何百万というお金をとる。最近では医者が狙われていますね。「医療ミスで患者が死んだ。表沙汰になると医者として続けられなくなるから、示談ですませるから」と言って、患者の弁護士に扮した者が親元に電話をして、何百万というお金を振り込ませる。あの手この手で、悔しい腹立たしい思いをさせられている人が多いのであります。「おれおれ詐欺」ばかりでなくて、今や経済の世界でも、ラベルの張替えというのがあってラベルも信用できない。その言葉が信用できないということですね。「国産」と書いてあっても、それは日本国産でなくて、オーストラリア国産だったり、アメリカ国産だったりします。国産と言えば普通日本産のことを言うわけですから、その種の言い逃れ、あくどい商法のようなことが、信仰生活でも一般化していたのが、イエス様が今日このようにおっしゃっている状況だと思うのです。

イエス様が本当に言いたいことは、『然り、然り』『否、否』で、つまり私たちが語る言葉が真実であり、そういう実体を持った言葉であることを求めておられるということでは

ないでしょうか。「はい」と言えば、それは「はい」なんですね。「はい、いたします」と言えば、それは固い約束なんですね。そのように、神殿にかけて、供え物にかけて、というような区別ではなくて、日常の生活も、礼拝生活も、生活のすべてを神様が支配をして、神様がすべてを見ておられる。だから私たちの特別のお祈りの言葉とか賛美の言葉とか、言葉の上ではそれは信仰的、宗教的ですけども、それもまた、空念仏ということもあるのですから、実質を失うことはありますね。そういう特別な言葉ではなく日常的な言葉しか使わないけれども、やはり言葉には真実があって、犠牲的に力を尽くして人に仕えるというふうな実態が普通の言葉使いをする人にあるとなれば、信仰とか言ってもそれはきれいな事ではないかと言われるような状態に我々が陥っているということもあるわけです。ですからお祈りの言葉であれ、賛美の言葉であれ、日常語であれ、どこでどういうふうに使われる言葉であっても、それはその言葉どおりの中身を持ったそういう生き方でなければならぬということをイエス様は言っておられるのではないのでしょうか。ですから、「はい、然り」と言ったら、それはもう誓いの実質を持っているということです。それを特別に、神の名を出したり、命をかけたして、「誓います。絶対間違いありません」などと力んで言わないといけないようなあり方は、むしろそこに嘘があるのではないか。「はい」と言えば、その「はい」が信用されるような生活、言葉でなければならぬのではないか。そういうことが、イエス様がおっしゃりたい本意だと思います。

ところで旧約聖書というのは、イスラエルの人たちのヘブライ語という言葉で書かれています。ヘブライ語で「ダーバール」というのが「言葉」です。けれどもダーバールというのは言葉でもあり、物事の本質もダーバールで表現するのです。そしてまた何か出来事が起こると、その出来事もダーバールという言葉で表わすのです。これはやはり神の言葉、それに自分たちの全存在を託して生きたイスラエルの民ならではの言葉使いだと思うのです。「言葉」というのは「本質」であり、「言葉」であり、それは「出来事」なのだ。語られた言葉というのは、言葉だけで終わらないで、必ず出来事になる。それは神の心から、本質から出て、語られたとおりの事が起こるのです。そういう意味では神ご自身が語られる方であり、その語られた言葉は、「光あれ」と言われれば、光がそこに起こされるわけがあります。そのような神様を信じて生きる者の言葉もまたむなしくあってはならない。そのようにイエス様は言っておられるのだと思います。

そのようなわけでもう一度、言葉使いということをよくよく気にしながら使うというようにところに引き戻されますけれども、そのようにして語るか語らないかはどちらでもいいのですが、神様の御心に適う内実ある生活をするそのことが、今日のこの言葉を通して私たちに求められているのだと、そのように思います。

お祈りします。

神様。私たちがあなたを信じ、あなたの御言葉にこの身を託して望みを与えられているように、どうか私たちの語る言葉、私たちの生活、それがあなたの真実に適うものとなりますように導いてください。この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。
アーメン